



# 鮮烈な画面に秘めた 絹谷幸二の “双眼”への思い

情熱ほとばしる独自の画風で知られる絹谷幸二。

その半世紀に及ぶ画業を通覧する

展覧会の開催が間近だ。

新作を描き上げたばかりの画家を訪ね、

いよいよ高揚する創作への思いを聞いた。



*exhibition*

絹谷幸二  
色彩とイメージの旅

8月22日～10月15日  
京都国立近代美術館

特別展示  
アフレスコの傑作  
『光ふる街』初公開

8月16日～11月27日  
大阪・絹谷幸二 天空美術館



エネルギーを描きたいという絹谷は《富嶽旭日風神雷神》にも自然の力を重ねている。2017年 ミクストメディア、カンヴァス 2点組 各194.0×130.3cm



京都を画題にした7点の連作より、龍が上賀茂神社の立砂に舞い降りる《朝陽龍神下山上賀茂神社》。135頁は本作の部分。連作のすべてに龍が描かれているのは「鴨川は龍だから」。2017年 ミクストメディア、カンヴァス 259.0×97.0cm



初期の代表作のひとつ《アンジェラと蒼い空II》。本展では、同時に描かれた《アンジェラと蒼い空I》と初めて同時展示される（前期のみ、9月18日まで）。1976年 漆喰・顔料、カンヴァス 194.5×259.5cm 東京国立近代美術館蔵

両面を同時に見るべきだと考える。「《富嶽旭日風神雷神》の上部は晴天、下部は嵐です。晴天と嵐が雲を境につながっている。私がこの何年かテーマにしている『不二法門』は大乗仏教の經典のひとつ『維摩經』が説く思想で、相反すると思われている概念は決して別々のものではなく、ひとつのもの部分であるという考え方です。

そして、色彩があるところは豊かで平和だ、と絹谷は続ける。「スキューバダイビングをしていると、40メートルほど潜ったあたりで途端に色が乏しくなります。エベレストの頂上や砂漠も同じく色がない。動植物の多様性がないのです。軍事政権になるとカラキ色が社会を占めるでしょう？ 色彩がないところは命の危険性を孕んでいるわけです。生きる悦びのある、色彩の世界を取り戻していきたい」

展覧会では絹谷の様々な思いが投影された作品が一堂に会する。出品されるのは120点超だ。会期中、関連企画として大阪の絹谷幸二天空美術館で特別展示もある。併せて楽しみたい。



完成したばかりの出品作《平治物語絵巻》三条殿焼討の前に立つ絹谷幸二。「これは平治物語絵巻へのオマージュ。京都を燃やしちゃったと言われるかもしれないけれど、戦争と平和という切り離しては考えられない世界を示したかった」。アトリエにて。撮影=広瀬達郎[本誌]掲載作はすべて「絹谷幸二 色彩とイメージの旅」展の出品作。

絹谷幸二（1943年生）といえば鮮烈な色彩を思い浮かべる方が多いだろう。その特質が萌芽したのは東京藝術大学大学院を修了後、イタリアに留学してからである。価値観の異なる地で暮らすことが自身の中に変化をもたらした。同地でアフレスコ画（フレスコ画）を習得して帰国すると、その古典技法を用い、現代的発想と鮮やかな色彩で描いた《アンセルモ氏の肖像》で安井賞を受賞。以後、独自の世界観を開拓していく。《アンジェラと蒼い空II》「左頁下」に見られるが、画中に文字を書き込む手法も斬新で、その先取性が批判されることもあった。80年代に入ると色づかいはより奔放になれる。近年は記紀神話や仏像をモチーフに、日本人の本質を考えさせられる作品も多い。そんな絹谷の初期から現在までの画業を通観する個展が開催される。

本展に出品する新作が描き上げた6月中旬、画家のアトリエを訪ねた。新作は、開催地である京都の風景を描いた作品が中心だ。「見たままの風景ではなく、人間と土地との関わりを絵にしました。京都ではありませんが、分かりやすく言えば、京都の象徴です。京都にとつて鴨川は龍。龍神は、水というエネルギーの恩恵を私たちに与えてくれる存在です。《富嶽旭日風神雷神》「左頁上左」は火と風のエネルギーを描いたもの。人間にとつて貴重なエネルギーを描きたい、というのも私の思いです」もつとも、自然の力は災害をもたらすこともある。絹谷は、その

綱谷幸二（1943年生）とい

すい例でいうと赤富士。これは砂鉄が影響した現象です。その砂鉄が野山でフルボ酸鉄と合体して海上に流れ込む。これをブランクトンが食べ、エビやカニ、魚が食べ、我々が食べる。だから自然が美しい

胆石や膀胱結石になりやすい。ヨーロッパでワインを飲むのは、葡萄は石灰を吸収しないからです。一方、日本の軟水は日本酒を生みました。人間と土地にはつながりがあります。それを広い視点でとらえて風景を考えたいのです

実際、新作14点のうち7点の連作には金閣寺や清水寺などが描かれているが、存在感を放つのは龍である。